

共感経験と被共感経験の関連

立教大学大学院現代心理学研究科 山本翔太

Relation between the experiences to empathize and to be empathized

Shota Yamamoto (Graduate School of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

In this study, it is assumed that for empathy to occur it is necessary to realize that oneself and another person are independent individuals. Empathy was defined as a feeling that is formed through the process of interactive communication that he is empathized, realizes and accepts himself, realizes and accepts, and empathizes another. The purpose of this study was to examine the relation between the experiences of empathizing and receiving empathy. Two questionnaires, Experience of Empathizing Scale and Experience of Receiving Empathy Scale were constructed based on the questionnaire, Empathic Experience Scale Revised (EESR) by Kakuta (1994). As a result of factor analysis, the related factors from each experience were extracted. It was found that receiving empathy correlates with giving empathy. It is suggested that analysis of the experience of receiving empathy makes it possible to analyze the ability to empathize in more detail.

Key words : empathy, be empathized, appreciation of the individuality

問題と目的

共感とは“他者の感情の理解を含めて、他者の感情を共有すること”（澤田，1998）であり、共感性は他者の理解を深め、円滑な対人関係や社会生活を構築する上で重要である（岩下，1975）。

共感性の認知的・感情的側面を測定する尺度の代表的なものとして、Davis（1983）の対人的反応指標（Interpersonal Reactivity Index）や登張（2003）の青年期用多次元的共感性尺度を挙げることができるが、共感性は研究者によってその定義のニュアンスが異なり測定方法も様々であるのが現状である。Davis（1996 菊池訳 1999）は、これまでの共感性の研究の問題点として“互いに区別すべきであるということについては、実際上は広く認められている”にもかかわらず“共感という用語が、2つの明らかに別の現象—認知的な役割取得と他人についての感情的な反応を示すものとして、使われ続けてきた”、“共感を考える際

に過程と結果を区別せずに使ってきた”と述べている。すなわち、認知的な面あるいは感情的な面だけではなく共感という概念の全体をみる時に、他者と認知的あるいは感情的な接触をする過程と、それに伴う自己の情動反応や他者理解という結果の両方を明確にする必要がある。共感性の測定に関するその他の研究も、他の特性との関連を検討したにとどまるものが多い（小池，2003；三原，1998など）。

このような中で、角田（1991，1992，1994）は、共感の感情面と認知面の相互関連から多面的でかつそれらを統合した高次の心的機能が必要となる現実の共感に接近した捉え方を重視した。そして、“能動的また想像的に他者の立場に自分を置くことで、自分とは異なる存在である他者の感情を体験すること”という共感の概念規定から、自己と他者の個別性の認識が確立されていることが共有体験を他者理解へとつなげるために重要と考え、「共感経験尺度改訂版」（Empathic Experience Scale

Revised：以下EESRとする）を作成した。EESRは、他者との共有体験が得られない経験と自他の個別性の認識との関係に着目し、共有経験尺度（Scale of Sharing Experience）と“他者の感情表出に際して、その他者との共有体験が得られなかった”という共有不全経験尺度（Scale of Insufficient Sharing Experience）の2つの下位尺度からなる。そして、共有経験と共有不全経験の2軸のそれぞれの高低を組み合わせ、共感経験の4つの類型を見出ししている。

さて、今までの共感に関する研究は「共感をする」側を対象としたものがほとんどであり、「共感をされる」側に着目したものはなかった。しかし、Barrett-Lennard（1981）は共感の5段階サイクルを提唱し、その第3～5段階を“共感する側が相手にその気づきを知らせる”，“相手は自分が理解されているという意識を持つ”，“相手は共感する側にフィードバックを与えつつ、表現を続けていく”として、共感される側も含めた過程を共感としている。角田（1997）は（共感に対する）“評価は、CI（クライアント）から次に何が返ってくるかに示されるのであり、他にTh（セラピスト）の共感の正確さをはかる指標は考えられない”と述べている。また、井上（2004）は双方向の共感的コミュニケーションとして“自分の共感を相手に伝え、さらに共感的な関係を構築していく”という自他の共感を提唱している。こうした考えに立てば、共感とは一方的なものではなく、相手との相互のコミュニケーションによって成り立つものであり、共感される側に注目することも必要であろう。

また、裴岩（2004）が“他者からの共感によって自己理解が進み、自己受容、他者理解、他者受容、そして他者への共感が広がる”と述べているように、共感されるという経験は自己の信頼感・安定感へとつながる。そこから他者を理解しようとする能動的な姿勢が生まれ、適切な対人関係の構築に大きな影響を与えているだろう。つまり、共感をされる経験と共感する経験との間には、密接な関係があると考えられるのである。発達のな

観点からは、渡辺・瀧口（1986）が“共感性の高い母親をもつ幼児のほうが、共感性の低い母親をもつ幼児よりも共感性が高い傾向”があると明らかにしていることも、これを示唆するものである。

さらに、日常においては必ずしも相手の気持ちをわかったり相手に自分の気持ちをわかってもらったりするとは限らない、むしろその方が少ない。そのため、双方にとって適切な相互コミュニケーションはそう容易には成り立つものではないということ、換言すれば、他者をより理解しようと努める姿勢には自分と他者は異なる存在であること（自他の個別性）を認識することが必要である。つまり、この認識を有していることが共感性の重要な要素と考えられる。

以上より、まず自他の個別性の認識を共感の前提に置く。そして、共感とは「被共感（共感される）の経験が自己理解・受容を生み、それが他者理解・受容と共感の経験へつながっていく」という過程を経て形成されるものであると定義する。従来の研究のように共感する側の経験の過程や結果のみを対象とするのではなく、共感と被共感の2つを測定することができる尺度を作成し、両者の関連を探り、この定義を検討することを本研究の目的とする。

具体的には、第一の目的として研究1において、共感経験と被共感経験のそれぞれを問う質問紙を作成する。その際、共感のプロセスと認知的・感情的要素を総合的に捉えている、自他の個別性の認識を重視しているという2点から角田（1994）のEESRを下地とする。共感経験の質問紙は、EESRと同じく「相手の気持ちをわかった」という共有経験と「相手の気持ちをわからなかった」という不全経験を問う質問項目によって構成される。そして、この共感経験の質問紙に対応する形で、「相手に気持ちをわかってもらえた」という被共有経験と「相手に気持ちをわかってもらえなかった」という被不全経験を問う質問項目によって被共感経験の質問紙を構成する。この両質問紙を用いて調査を行い、その回答結果を因子分析する。EESRと同様に、共感経験の質問紙において

は共有経験・不全経験の2つの因子、被共感経験の質問紙においても被共有経験・被不全経験の2つの因子が抽出されるという仮説を立てる。また、こうして作成された尺度の信頼性や基準関連妥当性についても検討する。基準関連妥当性については、2つの既存の尺度との関連をみる。他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感に受け取り、理解しようとする意識や関心を測定する他者意識尺度（辻、1993）と自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚である自尊感情を測定する自尊感情尺度（山本・松井・山成、1982）を用いる。

第二の目的として研究2において、作成された尺度の回答結果をさらに分析して、共感と被共感の関連性を検討する。仮説は次の通りである。共感経験については、上述のEESRと同様に共有経験と不全経験の2軸から、それぞれの高低の組み合わせによって、両方とも高い「両向型」、共有が高く不全が低い「共有型」、共有が低く不全が高い「不全型」、両方とも低い「両貧型」の4つの類型に分類する。そして、被共感経験についても、「相手に気持ちをわかってもらえた」被共有経験と「相手に気持ちをわかってもらえなかった」被不全経験の2軸のそれぞれの高低から、共感経験の類型と同様に「被両向型」「被共有型」「被不全型」「被両貧型」の4つの類型に分類する。そして、共感が自他の個別性の認識の上で被共感（わかってもらえた・わかってもらえなかった）の経験を通して形成されるものであるとすれば、

Table 1 共感経験の類型に対する被共感経験の仮説

	両向型	共有型	不全型	両貧型
共有	高	高	低	低
不全	高	低	高	低
被共有	高	高	低	低
被不全	高	低	高	低

Table 2 被共感経験の類型に対する共感経験の仮説

	被両向型	被共有型	被不全型	被両貧型
被共有	高	高	低	低
被不全	高	低	高	低
共有	高	高	低	低
不全	高	低	高	低

共有経験と被共有経験、不全経験と被不全経験はそれぞれ対応したものとなる。具体的には、被共感経験の「被共有」「被不全」の高低が共感経験の4類型の「共有」「不全」の高低と一致し、共感経験の「共有」「不全」の高低が被共感経験の4類型の「被共有」「被不全」の高低と一致する。

この両経験の類型とそれに対応する仮説を Table 1、Table 2 に示す。

研究 1

方法

質問紙の作成 質問項目の共感の種類を選定は、本研究の著者単独で行った。まず、「～感」という表現や感情を表す形容詞・擬態語を中心にできる限り多くの感情の名称を考え、32項目の感情をリストアップした。次に、EESRの質問項目で用いられている感情、および青年期を対象に共感の感情の種類を文章完成法によって調査した橋本（2004）の結果から反応数の順位が上位であった感情を参考に絞り込みを行った。最終的に、肯定的な感情・否定的な感情のそれぞれ7項目ずつ計14項目を選定した。

そして、その14項目の感情に関して、相手の感情を「わかった」「わからなかった」経験を問う形式の共感経験質問紙と、相手に感情を「わかしてもらえた」「わかってもらえなかった」経験を問う形式の被共感経験質問紙を作成した。いずれも各経験に対する意識の強弱を測る「いつもそう（6点）～どちらともいえない（3点）～まったくない（0点）」の7件法の質問紙とした。EESRでは「とても当てはまる～まったく当てはまらない」となっているが、質問項目の表現と適合しないために調査対象者によって捉え方が異なる可能性があり、上記のように改めた。

調査に用いられた質問紙の構成は以下の通りであった。フェイスシートでは年齢・性別の記入を求めた。その後、共感経験質問紙（「わかった」14項目、「わからなかった」14項目）、被共感経験質問紙（「わかしてもらえた」14項目、「わかてもらえなかった」14項目）、他者意識尺度（10項

目), 自尊感情尺度 (7 項目) を順に配置した。

調査時期・対象者および手続き 2005年10～11月に, 都内私立大学の学部生・大学院生を対象に, 集団法もしくは個別に手渡して調査を実施した。記入漏れの場合などを除いた有効回答の内訳は, 男子44名 (平均年齢21.0歳, *SD* 1.6歳) ・女子62名 (平均年齢20.1歳, *SD* 1.2歳) の計106名 (平均年齢20.5歳, *SD* 1.5歳) であった。

結果

因子分析 共感経験質問紙について, 主因子法・Promax回転による因子分析を行った。固有値の変化は10.60, 4.02, 1.42, 1.26, 以下省略という

ものであり, 2 因子構造が妥当であると考えられた。そこで, 2 因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を再び行った。その結果, 全ての項目が.400以上の十分な因子負荷量を示した。回転後の因子パターンと因子間相関をTable 3に示す。なお, 回転前の2 因子で28項目の全分散を説明する割合は52.59%であった。第Ⅰ因子, 第Ⅱ因子ともに14項目で構成されており, それぞれ相手の感情を「わかった」「わからなかった」という質問項目となっているため, 第Ⅰ因子を「共有経験」因子, 第Ⅱ因子を「不全経験」因子と命名した。これらの因子を共感経験を測定する下位

Table 3 共感経験質問紙の因子分析結果 (Promax回転後の因子パターン)

	I	II
v11. 相手が不安を感じているときに, その人の不安な気持ちを感じとったことがある。	.79	.02
v13. 相手がホッとしていると, 自分も安堵した気持ちになったことがある。	.79	.14
v14. 何かに苦しんでいる相手の気持ちを感じとって, 自分も同じような気持ちになったことがある。	.78	-.02
v16. 相手が何かに失望しているときに, その人のがっかりした気持ちを自分も感じたことがある。	.77	.03
v12. 人が何かができなくて劣等感を感じているときに, 自分もその人の気持ちを感じとったことがある。	.73	.04
v15. 相手があることに驚いたと語るとき, その人の驚きを自分も感じとったことがある。	.72	.00
v17. 相手が清々しい気分になっている場合に, その爽快感を感じとろうとし, その人の気持ちを味わったことがある。	.72	.04
v7. 悲しんでいる相手の気持ちを感じとって, 自分もその人の悲しさを経験したことがある。	.71	.10
v5. 孤独な相手の気持ちを感じとって, 自分も同じような気持ちになったことがある。	.66	-.07
v8. 相手が喜んでいときに, その気持ちを感じとって一緒にうれしい気持ちになったことがある。	.66	-.08
v9. 腹を立てている人の気持ちを感じとって, 自分もその人の怒りを経験したことがある。	.63	.00
v6. 相手の興奮を自分も感じとって, ドキドキしたことがある。	.60	-.11
v10. 満足した気分である相手の気持ちを感じとって, 自分も同じ気持ちになったことがある。	.54	-.08
v4. 相手が何かを期待しているときに, そのわくわくした気持ちを感じとったことがある。	.51	-.02
v22. 相手があることに驚いたと語っても, どうしてそんなに驚くのかわからなかったことがある。	.08	.85
v23. 相手が清々しい気分であっても, 自分はその人のように清々しく感じなかったことがある。	.11	.75
v20. 満足した気持ちでいる人と一緒にいても, 自分はその人の満足感がよくわからなかったことがある。	-.08	.75
v28. 相手が何かを期待していても, 同じようにわくわくしなかったことがある。	.05	.75
v21. 不安を感じている人といても, その人の不安を自分は感じるができなかったことがある。	-.05	.72
v19. 相手が何かに苦しんでいても, 自分はその苦しさを感じなかったことがある。	-.12	.72
v25. 相手が何かに喜んでいても, 自分はうれしい気持ちにならなかったことがある。	.12	.70
v24. 相手が孤独を感じていても, その孤独な気持ちを感じとれなかったことがある。	.06	.70
v27. 何かに失望している人といても, 自分も同じようにがっかりした気持ちにならなかったことがある。	.02	.69
v26. 悲しんでいる相手といても, 自分はその人のように悲しくならなかったことがある。	-.13	.68
v30. 相手がホッとした気持ちであっても, その人の安堵感を感じとれなかったことがある。	-.01	.66
v31. 相手が何かに腹を立てていても, 自分はその人の怒りがびんとこなかったことがある。	.03	.63
v18. 興奮している人といても, 自分はそのドキドキした気持ちを感じとれなかったことがある。	-.09	.61
v29. 相手が何かができなくて劣等感を感じていても, その劣等感を同じように感じるができなかったことがある。	-.25	.43
因子間相関		
	I	II
I	-	-.47
II		-

尺度と考え、2因子からなる共感経験尺度が作成された。

被共感経験質問紙についても同様に、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。固有値の変化は10.46, 4.18, 1.80, 1.41, 以下省略というものであり、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで、2因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を再び行った。その結果、.400以上の十分な因子負荷量を示さなかった1項目を分析対象から除外し、再び主因子法・Promax回転による因子分析を行った。回転後の

最終的な因子パターンと因子間相関をTable 4に示す。なお、回転前の2因子で27項目の全分散を説明する割合は53.42%であった。第Ⅰ因子は14項目、第Ⅱ因子は13項目で構成されており、それぞれ相手に感情を「わかってもらえなかった」「わかってもらえた」という質問項目となっているため、第Ⅰ因子を「被不全経験」因子、第Ⅱ因子を「被共有経験」因子と命名した。これらの因子を被共感経験を測定する下位尺度と考え、2因子からなる被共感経験尺度が作成された。

信頼性 信頼性を検討するために各下位尺度の

Table 4 被共感経験質問紙の因子分析結果 (Promax回転後の因子パターン)

	I	II
v49. 自分が何かに苦しんでいても、他の人は自分の苦しさを感じてくれなかったことがある。	.81	.00
v54. 自分が満足を感じていても、相手はその満足感を感じとってくれなかったことがある。	.79	.09
v58. 自分が失望した気分でも、他の人はそのがっかりした気持ちを感じとってくれなかったことがある。	.79	.04
v59. 自分があることに驚いたと語っても、他の人はどうしてそんなに驚くのかわかってくれなかったことがある。	.75	.05
v51. 自分が悲しんでいても、他の人は自分の悲しみを感じてくれなかったことがある。	.74	-.06
v55. 自分が孤独を感じていても、相手がその孤独をわかってくれなかったことがある。	.73	-.05
v46. 何かができなくて劣等感を感じていても、他の人は自分の気持ちをわかってくれなかったことがある。	.73	.09
v53. 自分が何かに腹を立てていても、他の人は自分の怒りをわかってくれなかったことがある。	.73	-.09
v47. 自分が何かを期待していても、他の人は同じようにわくわくした気分になってくれなかったことがある。	.71	-.04
v50. 自分がホッとした気持ちでいるときに、相手も同じような安堵を感じてくれなかったことがある。	.70	.09
v56. 不安を感じていると相手に伝えても、その気持ちを同じように感じとってくれなかったことがある。	.69	-.09
v52. 自分が何かに喜んでいても、他の人はうれしい気持ちになってくれなかったことがある。	.67	.10
v57. 自分が清々しい気分でも、他の人は自分のように爽快に感じてくれなかったことがある。	.63	.02
v48. ドキドキした気持ちでいるときに、他の人は自分の興奮した気持ちをわかってくれなかったことがある。	.60	-.16
v43. 不安を感じていることを伝えたとき、相手がその不安を同じように感じとってくれたことがある。	-.03	.78
v45. 自分が悲しんでいるときに、人がその悲しさを感じとってくれたという経験したことがある。	-.02	.75
v44. 自分が満足を感じているときに、人がその満足感をわかってくれたことがある。	-.09	.74
v40. 自分のドキドキした気持ちを他の人が同じように感じとってくれたことがある。	.18	.73
v33. 自分が喜んでいるときに、他の人がその気持ちを感じとって一緒にうれしい気持ちになってくれたことがある。	.07	.72
v41. 自分が腹を立てているときに、人がその怒りを感じとってくれたという経験したことがある。	-.01	.71
v36. 自分が何かを期待しているときに、他の人もそのわくわくした気持ちを同じように感じとってくれていたことがある。	-.06	.69
v37. 自分が何かに苦しんでいるときに、相手も自分と同じような気持ちになってくれていたことがある。	-.11	.68
v38. 自分が爽快な気分になっている場合に、相手がその清々しさを感じようとしてくれ、同じような気持ちになってくれたことがある。	.14	.67
v32. 自分が何かががっかりした気分でも、相手がその失望した気持ちを感じてくれたという経験がある。	.04	.65
v39. 何かができなくて劣等感を感じているときに、人が自分の気持ちをわかってくれたことがある。	-.03	.58
v34. 自分がホッとした気持ちでいると、相手も同じように安堵した気持ちになってくれたという経験がある。	.03	.58
v35. 自分が孤独を感じているときに、相手がその孤独な気持ちをわかってくれたことがある。	-.15	.47
因子間相関		
I	—	-.45
II		—

Table 5 他者意識尺度と自尊感情尺度との相関

	共有	不全	被共有	被不全
他者	.33 **	-.18		
自尊			.15	-.21 *

* $p < .05$, ** $p < .01$

α 係数を算出したところ、「共有経験」が $\alpha = .93$ 、「不全経験」が $\alpha = .93$ 、「被共有経験」が $\alpha = .91$ 、「被不全経験」が $\alpha = .94$ であり、信頼性が確認された。

他者意識尺度・自尊感情尺度との関連 共感経験尺度の下位尺度と他者意識尺度、被共感経験尺度の下位尺度と自尊感情尺度の相関係数(Pearson)をそれぞれ算出したところ、共有経験と他者意識で.33 ($p < .01$)の弱い正の相関を、被不全経験と自尊感情で-.21 ($p < .05$)のきわめて弱い負の相関を示した。共感経験尺度および被共感経験尺度と他者意識尺度および自尊感情尺度との相関をTable 5に示す。

考察

因子分析の結果、共感経験質問紙は「共有経験」因子、「不全経験」因子の2因子から構成され、それぞれの因子を共有経験尺度、不全経験尺度という下位尺度とし、共感経験尺度が作成された。被共感経験質問紙も「被共有経験」因子、「被不全経験」因子の2因子から構成され、それぞれ被共有経験尺度、被不全経験尺度という下位尺度とし、被共感経験尺度が作成された。

いずれの質問紙についても仮説通りの因子が抽出された。各因子の負荷量がほとんどの項目で.400以上となり、信頼性も高かったことから、質問項目の構成および質問表現も適当なものであったと考えられる。また、両尺度ともEESRと同様の因子構造となったことから、共感経験および被共感経験が(他者と感情を)「共有できたかどうか」という共有(被共有)経験と「共有できなかったかどうか」という不全(被不全)経験の2つの次元からなる同じ構造を持っている可能性が示唆された。

他者意識尺度・自尊感情尺度との関連について 辻(1993)の他者意識尺度、山本他(1982)の

自尊感情尺度を用いて、それぞれ共感経験尺度および被共感経験尺度の基準関連妥当性を検討した。その結果、共有経験尺度と他者意識尺度との間には弱い正の相関が見られた。共有経験は他者の感情を共有できたという経験であり、そのためには他者の感情表出に対して意識を向けることが前提となる。他者意識尺度はこの前提を測定するものと考えられ、他者への意識が強ければ共有経験に対する意識も強いと単純に考えることはできないが、両者には関連があることが示された。一方、被不全経験尺度と自尊感情尺度との間にきわめて弱いながらも負の相関が見られた。被不全経験は自分を認めてもらえなかったという自己に対する評価を下げる経験であり、自尊感情を下げるということとほぼ同じ意味を持つものと考えられる。また、被共有経験尺度との相関が見られなかったことについては、自尊感情が被共感の経験以外にも様々な要因に影響を受けるものであることが背景にあると考えられる。

研究 2

方法

研究1において行った調査で得られた回答結果を引き続いて研究2においても用いた。

結果

下位尺度間の関連 共感経験尺度、被共感経験尺度のそれぞれ2つの下位尺度に相当する項目の平均値とSDを算出した。「共有経験」下位尺度得点が平均3.40, SD 0.98, 「不全経験」下位尺度得点が平均2.45, SD 0.88, 「被共有経験」下位尺度得点が平均3.20, SD 0.84, 「被不全経験」下位尺度得点が平均2.68, SD 0.92であった。

次に、各下位尺度間の相関係数(Pearson)を算出した。「共有」と「被共有」は.57 ($p < .001$)、「不全」と「被不全」は.63 ($p < .001$)とそれぞれ中程度の正の相関を示した。「共有」と「不全」では-.45 ($p < .001$)、「被共有」と「被不全」では-.43 ($p < .001$)と中程度の負の相関を示した。「共有」と「被不全」は-.22 ($p < .05$)、「不全」と「被共有」は-.39 ($p < .001$)とそれぞれ弱い

Table 6 共感経験・被共感経験の両尺度の各下位尺度間の相関

	共有	不全	被共有	被不全	平均	SD	α 係数
共有	—	-.45 ***	.57 ***	-.22 *	3.40	0.98	.93
不全		—	-.39 ***	.63 ***	2.45	0.88	.93
被共有			—	-.43 ***	3.20	0.84	.91
被不全				—	2.68	0.92	.94

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

負の相関を示した。

共感経験尺度、被共感経験尺度の各下位尺度間の相関と平均、標準偏差 (SD)、 α 係数を Table 6 に示す。

共感経験・被共感経験の類型化と関連 共感経験と被共感経験の関連をさらに検討するにあたり、共感経験を類型化して従属変数とする場合と、被共感経験を類型化して従属変数とする場合の 2 通りに分けて分析を行った。

まず、共感経験尺度の回答結果から、平均値を基準として下位尺度の共有経験尺度、不全経験尺度の得点をそれぞれ高得点群と低得点群に分け、共有高低×不全高低の 4 つに類型化した。両方とも高い「両向型」、共有が高く不全が低い「共有型」、共有が低く不全が高い「不全型」、両方とも低い「両貧型」である。その結果、調査対象者が両向型 15 名、共有型 40 名、不全型 29 名、両貧型 22 名に分類された。類型と人数を Figure 1 に示す。

次に、被共感経験尺度の下位尺度の被共有経験尺度、被不全経験尺度の得点を独立変数とし 4 類型を従属変数として 1 要因分散分析を行った。「被共有」、「被不全」とともに有意な群間差が見られた (被共有: $F(3, 102) = 11.71$, 被不全: $F(3, 102) = 11.83$, とともに $p < .001$)。4 類型の各得点を Figure 2 に示す。Tukey の HSD 法 (5% 水準) による多重比較を行ったところ、「被共有」については共有型 > 両向型, 共有型 > 不全型, 共有型 > 両貧型, 「被不全」については両向型 > 共有型, 両向型 > 両貧型, 不全型 > 共有型, 不全型 > 両貧型という有意な結果が得られた。

共感経験尺度と同様にして、被共感経験尺度の下位尺度である被共有経験尺度、被不全経験尺度から、被共有高低×被不全高低の 4 つに類型化した。その結果、調査対象者が被両向型 21 名、被共

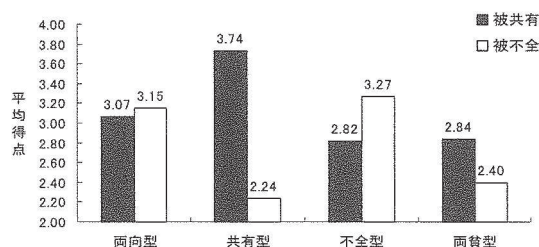
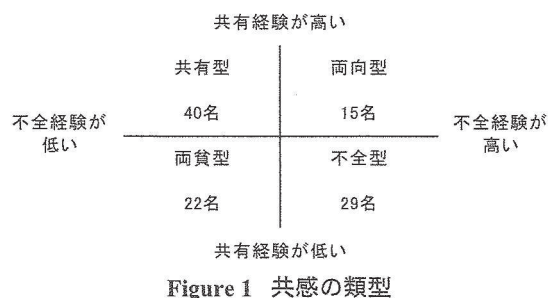


Figure 2 共感 4 類型の被共有・被不全平均得点

有型 36 名, 被不全型 31 名, 被両貧型 18 名に分類された。類型と人数を Figure 3 に示す。

次に、共感経験尺度の下位尺度の共有経験尺度、不全経験尺度の得点を独立変数とし 4 類型を従属変数として 1 要因分散分析を行った。「共有」、「不全」とともに有意な群間差が見られた (共有: $F(3, 102) = 8.49$, 不全: $F(3, 102) = 13.56$, とともに $p < .001$)。4 類型の各得点を Figure 4 に示す。Tukey の HSD 法 (5% 水準) による多重比較を行ったところ、「共有」については被両向型 > 被両貧型, 被共有型 > 被不全型, 被共有型 > 被両貧型, 「不全」については被両向型 > 被共有型, 被不全型 > 被共有型, 被両貧型 > 被共有型という有意な結果が得られた。

考察

作成された共感経験尺度・被共感経験尺度の下位尺度間の相関係数を算出したところ、「共有」

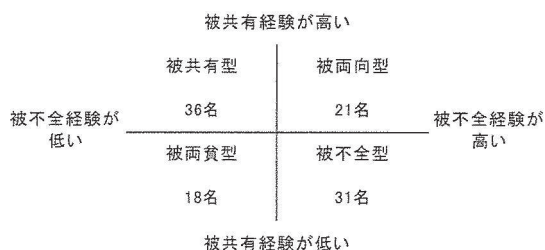


Figure 3 被共感の類型

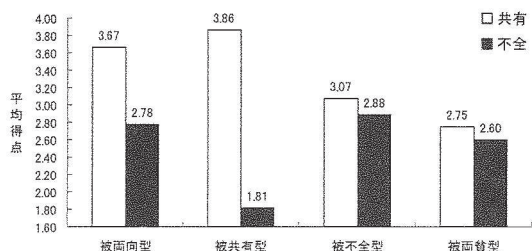


Figure 4 被共感4類型の共有・不全平均得点

と「被共有」、「不全」と「被不全」の間で中程度の有意な正の相関を示したことから、共感という経験と被共感という経験それぞれに対する意識の間には関連があると考えられる。そこで、この関連をさらに分析するために、角田（1994）と同様に共感経験および被共感経験を4つに類型化して従属変数とし、他方の2つの下位尺度を独立変数として1要因分散分析を行った。以下の考察をわかりやすくするために、共感経験、被共感経験の類型とそれに対する他方の下位尺度の結果をTable 7、Table 8に示す。

共感経験の類型からみた被共感経験 まず、角田（1994）による共感経験の4つの類型の特徴を以下に記す。両向型は、自他を独立した存在として捉えることができ、共感性が最も高い。対人的に信頼感と同時に適度な動揺しやすさもあり、自己の感情体験を内省できる。共有型は、自己の内省力は高く見えるが自他について未分化な状態にあり、本当の意味での自己理解ならびに他者理解はなされにくい。不全型は、自他の個別性の認識があり孤独感を持ち、対人的な信頼感が低い。潜在的には他者との関わりへの意識があるが他方でそれを阻む面をもつ。両貧型は、対人的な関わり

が弱く、最も共感性が低い。自他の個別性の意識が高いというよりも自己形成の弱さ、無気力、無関心といった傾向を持つ。以下、この4類型における被共感経験について考察する。

共感経験を類型化した場合の結果は、「被共有」について両向型と不全型、両向型と両貧型の間に有意な差が見られず、共有型と両向型の間に有意な差が見られたが、それ以外では仮説通りとなった。仮説と異なったのは、両向型の「被共有」が共有型より低く不全型、両貧型と差が見られなかったという点である。

不全型と両貧型については仮説通りの結果であり、ともに被共有経験、被不全経験に対する意識の強弱が共有経験、不全経験に対する意識の強弱に反映されていると考えられる。そして、共有経験が高いが不全経験が低い共有型については、相手に「わかってもらえた」という経験（被共有経験）がより強く意識されており、「わかってもらえなかった」という経験（被不全経験）はあまり意識されていない。EESRでは、共有型は個別性の認識は低く、相手が感情を表すとそれに応じて自己に生じた感情をそのまま相手と同じものとして捉えてしまうと推測されている。この傾向は、自己と他者で感情を共有できるという意識という点で、相手に「わかってもらえた」という自身の被共有経験に対する強い意識と関連があると考えられる。

一方、共有経験が高く不全経験も高い両向型については、相手に「わかってもらえた」という経験に対する意識は弱く、一方で「わかってもらえなかった」という経験は強く意識されている。これは、共感経験および被共感経験が容易に得られるものではないという認識の反映と捉えることができるだろう。そして、両向型よりも共有経験に対する意識が弱い不全型が両向型と同じく被共有経験を弱く被不全経験を強く意識していることから、この2つのタイプの差を生む、すなわち共有経験に対する意識に影響を与える要因の存在が示唆される。

被共感経験の類型から見た共感経験 まず、角

Table 7 共感経験の類型に対する被共感経験の結果

	両向型	共有型	不全型	両貧型
共有	高	高	低	低
不全	高	低	高	低
被共有	低	高	低	低
被不全	高	低	高	低

Table 8 被共感経験の類型に対する共感経験の結果

	被両向型	被共有型	被不全型	被両貧型
被共有	高	高	低	低
被不全	高	低	高	低
共有	高	高	中	低
不全	高	低	高	高

田（1994）に対応する形で被共感経験の4類型に推測される特徴をまとめておく。被両向型は、被共有経験と被不全経験ともに高く、自他の個別性を認識していることによる現実的で適度な対人的信頼感も有している。被共有型は、被共有経験は高いが被不全経験は低い。自己と他者が異なる存在であることへの意識が弱いという未熟な面はあるが、他者に「わかってもらえた」という経験の強さから対人的には安定している。被不全型は、被共有経験が低く被不全経験が高い。他者からそう簡単には「わかってもらえない」という対人関係について否定的な意識を持っているが、自他を独立した存在として捉えることができる。被両貧型は、被共有経験と被不全経験ともに低く、対人コミュニケーションの経験に乏しいあるいはそれに対する自意識や感受性が低い。

被共感経験を類型化した場合の結果は、「共有」について被両向型と被不全型の間に有意な差が見られず、「不全」について被両向型と被両貧型、被不全型と被両貧型との間に有意な差が見られず、被両貧型と被共有型の間に有意な差が見られた。それ以外では仮説通りとなった。仮説と異なったのは、被不全型の「共有」が他3つの類型と差が見られず中程度であり、被両貧型の「不全」が被共有より高かったという点である。

まず、被両向型については、4つの経験すべてに対する意識が強く、被共有経験が低かった共感経験の類型での両向型とは異なっている。被両向

型は、共有経験、被共有経験ともに意識が強く自己と他者で感情を共有できるという意識を持ちながら、不全経験、被不全経験への意識もまた強いことから自他の個別性に対する認識も有している。両者を直接に比較した結果ではないが、被両向型は、被共有経験の低い両向型よりも他者との情緒的なコミュニケーションに対して適度にバランスのとれた捉え方をしているか、あるいは自己と他者の感情共有ができた、できなかったという両極の間で揺れている不安定な状態であると考えられることができるだろう。この点については、さらなる研究が必要である。被共有型については、それぞれの経験の高低が同じであることから、共感経験の類型での共有型と同じ特徴をもつものと考えられる。そして、被不全型の共有経験が中程度となった背景には、共感経験の類型の方で不全型が両向型と同様に「被共有」が低く「被不全」が高くなったことから、2つの類型に属する人が混在しているためと考えることができるだろう。次に、被両貧型については、共有経験に対する意識が弱く不全経験を強く意識しており、共感経験の類型での不全型とは被不全経験の高低という点で異なるものである。不全型が共有・被共有が低く不全・被不全が高いことは、他者との情緒的な関わりが不安定で適切でないことが多かった、あるいはそのような経験を強く意識しているためであると考えられる。その一方で、被共感経験の被共有・被不全がともに低い被両貧型は、潜在的には他者との関わりを求めているが他者との情緒的な関わる機会を今までに十分に得てこなかった。そのために、他者が感情を表す場面に会ったとしてもそのような機会の少なさから相手の感情を感じとれないと推測される。

総合的な考察

本研究では、今までの共感性の研究では扱われてこなかった「共感される（被共感）」という経験に着目した。既存の共感経験を問う質問項目に対応する形式で被共感経験を問う質問項目を追加し、それぞれ共感経験質問紙・被共感経験質問紙

として調査を行った。因子分析の結果、EESRと同様に、共感経験尺度は共有経験尺度・不全経験尺度、被共感経験尺度は被共有経験尺度・被不全経験尺度のそれぞれ2次元の下位尺度からなるという構成になった。そして、各下位尺度の相関係数を算出した結果、共感経験と被共感経験の間には関連があることが示唆された。そこで、共感経験と被共感経験をそれぞれ類型化し分散分析を行って、両者の関連をさらに検討した。以下に、共感性の類型化に対する新たな見解をまとめる。

第一に、共感経験の共有経験と不全経験に対する意識の強弱は、それぞれ被共有経験と被不全経験の意識の強弱と関連があると考えられる。特に、共感経験の類型の1つである共有型については、被共有経験の意識が他の3つの類型よりも強く、自己と他者との感情共有という点で、共有経験と被共有経験の意識の間の関連がうかがわれる。第二に、共感経験の類型の両向型と不全型は、共有経験の意識では両向型で強く不全型で弱いと異なりながら被共感経験については両者ともに弱いという結果となったことより、共有経験に対する意識を形成する要因として被共感経験以外の変数が存在する可能性がある。第三に、被共感経験の被両向型が共有・不全・被共有・被不全の経験すべてに強い意識を持っており、共感経験の両向型とは異なる結果となった。このことから、被両向型は他者とのコミュニケーションに対して適度にバランスがとれているという意識を持っている、あるいは自己と他者の感情共有の成否の両極の間で揺れている不安定な状態であるという2つの可能性が考えられる。被共感経験を含めることで新たな研究の必要性が示されたと言える。第四に、被共感経験の被両貧型が仮説と異なり不全経験に対する意識が強かった。共感経験の類型での不全型とは被不全経験の高低という点で異なっており、不全型が不安定で適切でない他者との情緒的な関わりへの意識が強い一方で、被両貧型は志向性を持ちながらも他者との情緒的な関わりの機会を今までに十分に得てこなかったために、他者の感情表出に対処できないという意識を持つに至ったと

推測される。以上のように、共感経験尺度と被共感経験尺度の関連を検討することによって、共感性のより詳細な類型化が可能となった。

また、成田（1999）は“自分の気持ちすらときにはわからないことがある。まして他人の気持ちというものはなかなかわからないものである。めったにわからぬといった方がよい。わかろうと努めれば努めるほどその限界がみえてきて、自己と他者が別の存在であることがあらわになることがほとんどである”と共感の成立の難しさを述べている。これは共感する側からの共感の限界性についての論であるが、共感される側に視点を移してみれば、人とのコミュニケーションにおいては必ずしも相手に「わかってもらえる」（被共有）わけではなく、むしろ「わかってもらえない」（被不全）ことの方が多いということになる。そして、この被共有と被不全の経験を通して、自分と相手が異なる存在であり、共感はその容易に成り立つものではないという認識が形成されていくものと考えられる。さらに、祖父江（2004）は“私たちは母なる子宮から生まれ出た以上、もはや一体的万能感を形成できるほど無垢ではない。かといって、まったく個として分立してしまうほど強くもない。その二つを包含し、私たちが人としての関係性に希求できるものとして、分離（孤独）を認識したうえでの理解によるつながりという、二重構造的な共感概念を提示できるのではないか”と述べている。心理療法においては、クライアントはセラピストからの“分離の痛みを理解し、共有しながらも、なおかつお互いが別個の存在であることを認めるというパラドキシカルな共感”に支えられながら、自己の体験過程に気づいていく。つまり、心理療法においても一般的な発達においても、共感性の形成のプロセスは、「わかってもらえる」（被共有）経験と「わかってもらえない」（被不全）経験を通して自己受容・理解をしていき、他者の受容・理解、共感へとつながっていくというものであると考えることができるだろう。

このように、共感される側の視点を加えることで、「自他の個性を前提として被共感の経験を

通して形成される共感」をより明細に捉えることが可能になると考えられる。

今後の課題としては、本尺度の結果の量的な分析だけでは限界があるということである。共感と被共感は相互にかつ重層的に関連しており、被共感が共感に至る、あるいはその逆の過程にはこれら2つ以外にも要因が存在すると考えられ、被共感の概念も明確にされていない。また、今回は十分ではなかった両尺度の妥当性についても再検討の余地がある。研究をさらに進めるにあたっては、面接法や投影法などの質的な手法を用いて本尺度との関連を検討することなどが必要であろう。その上で、セラピストやクライアントの共感性の測定あるいは心理療法を通してのその変化の測定に用いるなど、本尺度を心理臨床においても応用することができると思われる。

引用文献

- Barrett-Lennard, G. T. (1981). The empathy cycle: Re-finement of a nuclear concept. *Journal of Counseling Psychology*, **28**, 91-100.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.
- Davis, M. H. (1996). *Empathy: a social psychological approach*. Boulder, Colo: Westview Press.
- (デイヴィス, M. H. 菊池章夫 (訳) (1999). 共感の社会心理学 川島書店)
- 橋本秀美 (2004). 青年期の共感性に関する探索的研究—文章完成法 (SCT) を中心にした分析— 夙川学院短期大学研究紀要, **29**, 27-35.
- 巖岩奈々 (2004). カウンセリングにおける共感の意味 井上孝代 (編) 共感性を育てるカウンセリング 川島書店 pp.67-92.
- 井上孝代 (2004). マクロ・カウンセリングにおける共感の意義 井上孝代 (編) 共感性を育てるカウンセリング 川島書店 pp.27-47.
- 岩下豊彦 (1975). 共感の社会心理 春木豊・岩下豊彦 (編著) 共感の心理学 川島書店 pp.121-170.
- 角田 豊 (1991). 共感経験尺度の作成 京都大学教育学部紀要, **37**, 248-258.
- 角田 豊 (1992). 共感経験尺度 (EES) の妥当性 教育心理学研究, **40**, 178-184.
- 角田 豊 (1994). 共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み 教育心理学研究, **42**, 193-200.
- 角田 豊 (1997). 共感体験の探索について 甲子園大学紀要 - 人間文化学部編, **1**, 63-79.
- 小池はるか (2003). 共感性尺度の再構成—場面想定法に特化した共感性尺度の作成— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **50**, 101-108.
- 三原 亘 (1998). 共感性尺度の認知側面に関する一研究 性格心理学研究, **6**, 152-153.
- 成田善弘 (1999). 共感と解釈—患者と治療者の共通体験の探索 成田善弘・氏原寛 (編) 共感と解釈—続・臨床の現場から 人文書院 pp.11-30.
- 澤田瑞也 (1998). カウンセリングと共感 世界思想社
- 祖父江典人 (2004). 共感の2種 「融合としての共感」と「分離としての共感」 心理臨床学研究, **22**, 1-11.
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達：多次元的視点による検討 発達心理学研究, **14**, 136-148.
- 辻 平治郎 (1993). 自己意識と他者意識 北大路書房
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ (1986). 幼児の共感と母親の共感との関係 教育心理学研究, **34**, 324-331.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.